

<目的>

- 1) 被災した陸前高田の状況をしっかり視察すること。仮設住宅や地域で出会う方々が、どのような体験をされたのかを想像できるように、津波被害の実態をきちんと見ておくこと。
- 2) 地域で出会う方々と交流することにより、地域を知ること。
- 3) 個人的な交流を深め、継続すること

<日程>

【行き】 14 日東京 940 発・大宮 1005 発「やまびこ 55 号」 一ノ関 1213 着

【帰り】 16 日一ノ関駅 1840 発「やまびこ 64 号」 大宮 2046・東京 2112 着

<参加者>

・福祉学科 1 年（1 名）、現代心理 2 年生（1 名）、コミ政 3 年（3 名）、福祉 3 年（1 名） 計 6 名

<プログラム>

14 日	14~17 高田地区視察 陸前高田駅前商店街、市役所・文化センター、マイヤ、市民体育館、陸前高田高校、雇用促進住宅、	学部 DVD 撮影のための撮影隊が同行。 解体が決まったこれらの場所をもう見られないかもしれない。少し時間を掛け
15 日	小友・広田地区視察 小友小・小友中・小友駅・広田大野湾、米崎から脇ノ沢を通り三日市までの海岸線 1110~1200 東海新報社 1200~1430 「寿限無亭」 15 シタボ・小豆沢仮設の方々と BBQ ・暮石温泉 1945 吉田氏夫妻をサポートハウスに招く	元の風景の写真や地図を持ち、何があった場所か確認しながら歩く。熱中症に気を付けながらできるだけ外を歩く。 震災当日からの記者がみた状況を聴く。 津波の映像を見せていただく。 2 時間 BBQ しながら交流。話しの聴き方を教える。
16 日	920~1100 モビリア仮設照井氏・浜田氏宅 1100~1400 モビリア仮設佐藤氏宅（元市議）（昼食） 吉田さんの家があった場所を案内して頂く 1500~ サポートハウス掃除・片付け 1630 サポートハウス出発	何度か行っているお二人の仮設住宅の家に上がり、生活歴など聴く。佐藤氏は初めてだが、長く市議をしてこられ、陸前高田の様子を教えていただく。吉田さんが見送りに来てくれ、家跡も見る。 大量の洗濯とゴミを片付ける。

1, 視察について

9 月以降順次解体が決定した市と県の大型建築物を見て回る。震災以降ほとんど手つかずの場所で、津波被害を感じることができる数少ない場所となっている。撮影隊が密着していたのでやりにくい面もあった。しかし、元の地図を持ち、「スーパーがあった」「ここは床屋さん」などと確認しながら駅前通りを歩き、市役所屋上から撮影された津波の映像を市役所前で見ると、できる限り実感できるよう工夫しながら見て歩いた。残暑が厳しく東北と思えないくらい 33 度以上となり、夜も気温が下がらないため、熱中症に気を付け水分を摂りながら、できるだけ外を歩き、建物の中に入るようにした。



<右奥陸前高田高校、左体育館>



広田の海岸防潮堤も壊れたまま



陸前高田高校体育館

2, 交流

- 1) 鮮魚シタボさんとの交流では、たまたま別団体が来られていて、小豆沢仮設住宅に住む方々がBBQをしていた所に一緒に入るように言われ、2時間ほど交流ができた。別団体が帰られてからは、我々だけで話しを伺う。消極的な学生に対して、話しをするように促し、その場で「自分たちだけで固まらないこと」「これは何ですか？でもいいから話し掛けること」など、指示しながら交流することができた。今後も仮設の方々とも交流できるようにしていきたい。



2) モビリア仮設

- ・ 照井氏（76）は、4回目の訪問。学生を連れては初めて。大工の出稼ぎを長くしてこられ、市役所付近に家を建てていて、被害にあった。息子がたまたま家に居て一緒に来るまで高台に逃げ助かったが、近所の人たちは皆避難場所の市役所前の公園に逃げて亡くなった。息子たちは一中仮設にいるがほとんど来ず、一人暮らしのため誰とも話さない日が続き寂しい。車の免許無いため出掛けることもできず、「話しがしたい」「来て欲しい」と言われ訪問している。今回は、出稼ぎ時代の話しを色々聴くこと、記録に残すことを目的に訪問した。
- ・ 浜田さんは、3回目の訪問。マイヤ近くで店をしていたが、犬の散歩に行っている間に地震発生。高台に居て助かった。近所の人々は皆亡くなり一人。犬がいるため避難所も仮設も入れず、今年になってモビリアに来たため、友人が少なく学生に話し掛けてくれた。その最初に時にいた学生がいたことから、挨拶に行き学生だけ（3名）で訪問。再会を楽しんだ。



- ・ 佐藤氏（83）は、照井氏の家の前を歩いていた学生に話し掛け、家に上げてくれた。「ボランティアを頼んで自分は休んでそれを見ている怠け者がいる。自分で汗をかかなきゃだめだから、ボランティアは頼まない。自分の家の片付けは自分でやっている。」と話し始め、その後2時間以上も話して下さった。陸前高田市議を35年も勤め「体育館を避難所に指定したのは自分たち。そこで80人以上も亡くなってしまったのは自分の責任。人と集めて殺したことになる。反省もしながら新しい陸前高田を作らないといけな。自分も復興委員会に入れて欲しい。色々提案したことがある。」など気骨溢れる方から若い学生へのメッセージをもらった。
- ・ 吉田氏（77）は、流しそうめん準備からの交流が続いている。今回は、25年前に2年間文通していた元中学生の連絡先が分かったので、それを伝え、直接電話して貰った。その様子を撮影して貰った。塩尻中学校の元生徒たち（40歳）がこの日同窓会を開き、吉田さんの思い出の品を持ち寄ることを話合ってくれていた。今後昔の写真や卒業アルバム、吉田さんのために吹き込んだメッセージテープなどを持っている人がいないか連絡をとつ

て集めることになった。また、今後松山とも連絡を取り合い、吉田さんを塩尻に呼んで25年振りに交流することを企画することになった。二日目の夜には、吉田さん夫妻をサポートハウスに招き、9期学生が作った記念のアルバムを渡した。手の込んだアルバムを作ってくれて「一生の宝だ。これまでの写真や手紙、50年つけてきた日記など全部流してしまったから、こんなものを貰えて本当にうれしい。仮設で一番の幸せ者だ。毎日見させてもらう。」ととても喜んでくださった。三日目には見送りに来て下さり、自宅があった場所を案内し、その地域の様子を話して下さいました。



3. その他

1) 東海新報社（大船渡・陸前高田の地元新聞社）本社訪問

- ・ 白井氏（営業）より、震災当日から新聞刊行の様子を、実際の新聞を見ながら説明を受けた。当日から避難所を回り手書きの避難者名簿を写真に撮り、会社で名簿に起こして避難所に配布した。最も必要だったのが「家族の安否」だった。ガソリンが無い、道が通れない中必死だった。3週間くらいは家に帰れず、風呂にも入れず、夜遅くまで名簿造りをしてきた。3月一杯は無料配布していた。 Etc.
- ・ また、本社から撮影した、大船渡湾港堤防を乗り越え、街になだれ込んでいく津波の映像、大船渡市に押し寄せる津波映像などを見せて頂きながら説明を受けた。

2) 「寿限無亭」での流しそうめん

- ・ 東海新報社本社の山の上にある「寿限無亭」にて、大きな仕掛けの流しそうめんを食べ、山小屋で楽しむ。

